

I アブラハムは神から多くの祝福をいただいていた。最も大きな喜びはイサクを与えられた恵み。神の約束から25年を経て、彼が100歳の時、イサクを与えられた。驚きの奇蹟。老夫婦にとり神の真実を確認する最大の喜び。そのような中で、「神はアブラハムを試練に会わせられた」：1。神からの恵み、喜びを噛み締めている矢先に、突然、神は「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい」と言われた。全焼のいけにえとは、動物をほふり、祭壇の上で完全に焼き尽くす礼拝儀式。神への全き献身を意味する。神の約束は、カナンの地を与えるという事、子孫が星の数ほどに増え広がるというもの。その約束を与えられて、自分の故郷から召し出された。いつ約束が成就するのか、分からず、御心を求めての苦悩の歩みだった。その苦悩の中で彼は神への信仰を学び信仰を豊かにされて行った。25年の後に完全に不可能に思える限界の中でイサクが与えられた。神の恩寵を喜び噛み締めていた謙遜なアブラハムだった。ところが、長い間、待たされて、ようやく与えられた、たった一人の子を与え主の神に奉げなさいと命じられた。イサクはもはや幼児ではなかったと思われる。子の成長を喜び、ひとり子に特別な愛情を注いだ。その子に、父親自ら手をかけて縛り、ほふり血を流し、祭壇の上で焼き尽くすように命じられた。信じがたい神のご命令。愛する子を取られるよりも、親である自分の命を取られるほうが、まだ良い。これが親ごころ。II しかし、この神のご命令を聞いて、アブラハムはすぐに行動に出る。3節に「翌朝早く」とある。神への応答と決断は早い。躊躇することなく、ロバに鞍をつけ、イサクを連れて出発。たきぎをイサクに負わせ、火と刀を手にとって、二人は一緒に進んで行った。ふたりの間の沈黙を破るのは息子イサク。「イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は「何だ。イサク（原語：わが子よ）」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか」：7。この時、アブラハムは、愛する子に、こう答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。：8。ついにその場所に来ると祭壇を築き、薪を並べ、イサクを縛って、その上に寝かせた。手を伸ばし、刀を取り、自分の息子をほふろうとする。ところが、主の使いがアブラハムを呼び、それをとどめた。そして神の試練が終了する。「あなたの手を、その子にくだしてはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた」：12。全焼のいけにえの意味は、もともとすべてが神のものであり、自分が握りしめて、差し出せないものは、何もないとの告白。アブラハムは、長い間待って、ついに与えられた神の約束の子、愛しているたった一人の子、そのイサクすら、これだけは許して下さいと言って、自分の手元に置いて、神に差し出す事を控えようとはしなかった。彼は神を恐れ敬い、神に委ねた。神への信仰が明らかになった。主の使いが止めなければ、彼は神への信仰の故にイサクを実際に屠っただろう。その真の信仰をご覧になった神は、止められた。信仰においてアブラハムは、イサクを完全に神に奉げた。自分の手に握りしめて離さないものは

何もない事を神の前に表明した。彼は、イサクを心から愛していたが、それ以上に神を恐れ、神を愛していた。絶えず私達に問われている事は、自分の為に神を利用する人生か？すべての恵みを与えて下さっている神に、自分自身を、自分に与えられているものを神の栄光の為に用いていただく人生か？神の恵みのご計画の中に置いていただいて、自分のものではなく、神のものを委ねられて、神のご計画の中で使命を果たさせていただくという人生。イサクを愛する事、その成長を楽しむ事も恵み。しかし、あくまでも究極的には、イサク、また私達に与えられた子供又すべてのものは、私達の所有物ではなく、神のもの。私達を愛されている神の栄光の為に神が私達に預けられたものを大切に用いる事、いつでもそれを主のものであると自覚する信仰が養われますように。神のご計画は祝福。その御計画に従順である時、私達が我が道を行こうとする歩みより、はるかに幸いな歩みをする事になる。私達が、自分のプライドや自己中心の考えを神に押し付けて、神から預けられたものを自分の型にはめて生きようとするのではなく、まず神の御心を求めることが出来ますように。神はアブラハムを愛する故に、彼の自由意思をもって、神にどのように応答するかを見ようとされた。全面的に神を信じ神の恩寵に生きるかをためられるのが試練。神との機械的な関わりではない。アブラハムを、神のご計画と友としての交わりに召されたのは神。神は彼の思いを確認された。「彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です」ヘブル 11:19。神がひとり子イエスを死に渡し、復活させた事を指し示す型。Ⅲ アブラハムが目を見てみると、一頭の雄羊がいた。「それを自分の息子の代わりに全焼のいけにえとしてささげた」：13。「その場所を、アドナイ・イルエ（主が備えて下さるの意）と名づけた。今日でも、『主の山の上には備えがある』と言い伝えられている」：14。この試練の山において、主によりすべてが備えられていた。Ⅱ 歴代 3:1 では、今回のモリヤの山はエルサレムと結び付けられている。そこは、神のひとり子である主イエスが、神の小羊として、私達の罪を負って、身代わりに十字架にかかって下さった所。父なる神は、アブラハムを試みつつ、ご自身は実際に、自分の大切なひとり子を私達の為にささげられた。神は私達に対して、もっとその愛を惜しみなく示して下さった。このアブラハムを召された神のご計画は、実は、私達の為の主イエスの救いのご計画につながっている。素晴らしい恵み！単に神がアブラハムを試みられたのではない。神は、アブラハムに、ご自分がなさそうと考えられているご計画と深い痛みをお示しなされた。本当に私達人間の罪の為にご自身をお奉げになる神の愛が示されていた。神が、愛する友であるアブラハムにご自身を示し、伴う痛みを共有するようにと考えておられた。神はご自分の最も大切な物を惜しまず与え、私達にすべてを与えて下さった。それに比べ、私達は、自分のものを握りしめ、惜しまず与える事に貧しい者。もし私達が握りしめている手を開けば、その開いた手に神は恵みを惜しみなく握らせて下さる。神を自分の為に利用する人生ではなく、神のひとり子さえ惜しまずに与えて下さった神の為に自分を用いていただける人生に変えられますように。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう」ローマ 8:32。神の愛と恵みを心から感謝します。